

筧克彦「日本体操」の理論と実践

中道 豪 一

はじめに

本稿は筧克彦が考案したといわれる「日本体操」⁽¹⁾の理論と実践について考察を加えたものである。刊行・未刊行史料の記述を基に日本体操経験者から実態の聞き取り調査を行い、そこから得た結果に対し、筧の神道論を絡めて分析を行った点に本稿の特長がある。

日本体操は皇国運動とも記載されるが、「にほんたいそう」⁽²⁾「こくこくうんどう」ではなく共に「やまとはたらき」と読む。『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』等の古典の内容を十六の動作で表現した体操であり、皇国精神・随神らの精神の実修と健康増進等を目的に大正初期から官民各方面で行われた。学校方面では愛知県立農林学校、山形県自治講習所、茨城県の日本国民高等学校・満蒙開拓青少年義勇軍訓練所をはじめ広く行われ、朝鮮・台湾の総督府や満

洲でも実施された記録が残されている。また宮家でも実践されたことが確認されている。⁽³⁾

しかしながらこの日本体操は、昭和二〇年以降、考案したとされる筧克彦の思想・業績ともども、文献や近代神道の状況把握に立脚した詳しい調査・研究の対象となることは極めて稀であった。日本体操に至っては、筧本人が晩年まで改良を加え、娘婿である三瀧信吾が継承し続けたものの、その実態や経緯をまとめた業績は存在しない。そして平成二六年現在、全国各地で日本体操を修めた人物が生存しているものの、大々的な実施の場がないことから、その全容は次第に忘却の彼方に押し去られようとしているのが現状である。そしてなにより日本体操を含む筧克彦研究において、文献史料に依拠しない分析や、近代神道の研究成果を無視する研究が発表されており、混乱している感が否めない。

そこで本稿は、日本体操の理論と実践を明らかにすると、大正から昭和前期にかけて実践された神道論的一幕を明示することを第一の目的とし、その実践に対して神道教育研究の立場から分析を加えることを第二の目的として考察を展開した。具体的には「いかに教えたか」を明らかにしようとする角度から、『皇国運動』『神あそびやまとばたらき』『日本体操』といった文献の記述を、体験者の証言で裏付けすることで日本体操の理論とバリエーションを提示する点に注力し、実践例として茨城県の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所等を挙げその理解を確かなものにするよう配慮した。

一 日本体操の動作とバリエーション

まず日本体操を詠んだ歌をいくつか紹介する。

「九重の庭に弥栄の神あそびわらひてぞまふ老も若きも」

「弥栄に さかえたまへと 君をいはふ 声とよむなり 国の内外に」

「もろ人と心あはせてたのしくも朝日をおろがみ神あそびせむ」

「神遊び あそべばやがてわがこころすがすがしくもゆたけかりけり」

「しめします みことかしこみつかさ人いよとはげまむやまとばたらき」

「いにしへを尋ねてここに新らしくあみ出しけむわざとたふとき」

この五首を詠んだ人物にはある共通点が存在する。それは全員が貞明皇后の女官ということだ。読み手は順番に典侍千種任子・正親町鍾子・権典侍竹屋津根子・掌侍吉見光子・権掌侍高松歳子・皇后宮職御用掛吉田鞆子となる。千種任子といえは明治一六年に薨去された詔子内親王の御生母、正親町鍾子は明治天皇の侍従正親町実正伯爵の妹君、吉見光子は出家出身ながら特例で掌侍に進まれた来歴をお持ちであること等、その背景に思いを馳せると尺きぬものがある御顔ぶれである。寛と貞明皇后との交流は「貞明皇后への御進講における寛克彦の神道論―「神ながらの道」の理解と先行研究における問題点の指摘―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊五〇号平成二五）で触れた通りである。

こうした方々の御歌約二〇首は『神あそびやまとばたらき』の第十四章に「こずゑの白玉」としてまとめられているが、続く「木かげの白玉」も陸軍将校有賀成可をはじめ、朝鮮総督府事務官石黒英彦をはじめ錚々たる面々の歌を収めている。國學院大學教授河野省三の詠んだ「明く淨く正しく直き心にぞ此の世榮行くやまとばたらき」ほか二

首も確認できる。日本体操の広まり・あり方を象徴する事例であろう。

よって右の歌群から日本体操に対する印象の一端を窺えるわけだが、そもそも日本体操とは何なのか。論考を確かなものにするため、本項ではまず動作という外郭的な面から考察を進め、思想については次項以降において歩みを進めたい。

寛は日本体操を四部一六節の運動であると説明する。⁽³⁾ 第一部は「一 立て」から「五 吹き棄て」。第二部が「六 いざ進め」から「八 参る上れ」。第三部が「九 氣息」とのり」から「十六 いやさか」といった構成だ。一部から順に「人格の根源の反省」「参る上り」「弥栄の理想」「理想の実現」等、動作群の意味を強調する分類が為されており、天地の創設作用に従い発展してきたという神代神話の意味を理解できるように配慮されている。寛は他の箇所では日本体操を三部構成として表現している箇所もあるが、これは四部構成の二部から四部の連続性と、最後の「いやさか」を強調するものであり根本的な差異はない。⁽⁴⁾

体操の動作としては「一 立て」から「十 神遊び」までの一〇節は動作が中心で「十一 ひと笑ひ」から「十六 いやさか」までの六節は唱和を交えた動作、もしくは唱

和のみの動作となる。

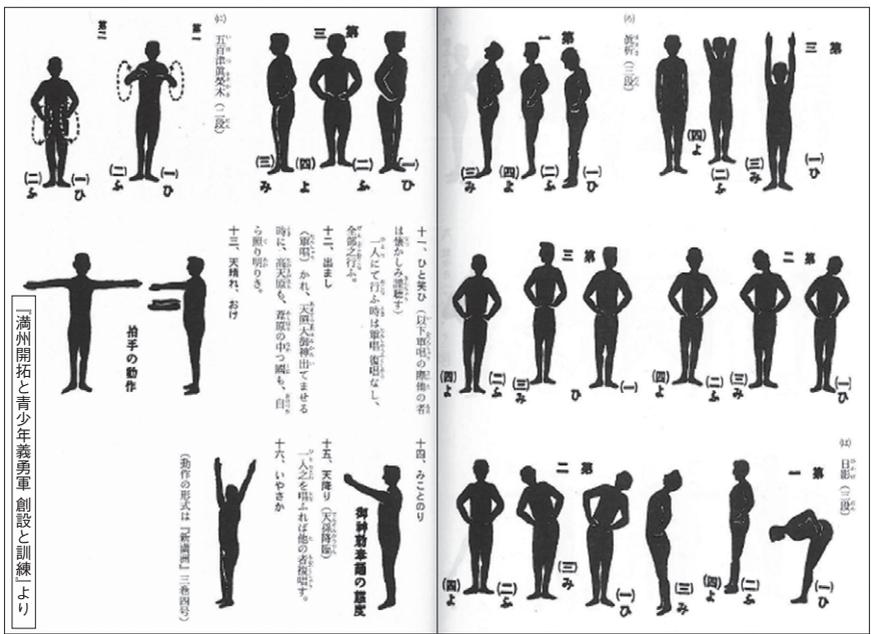
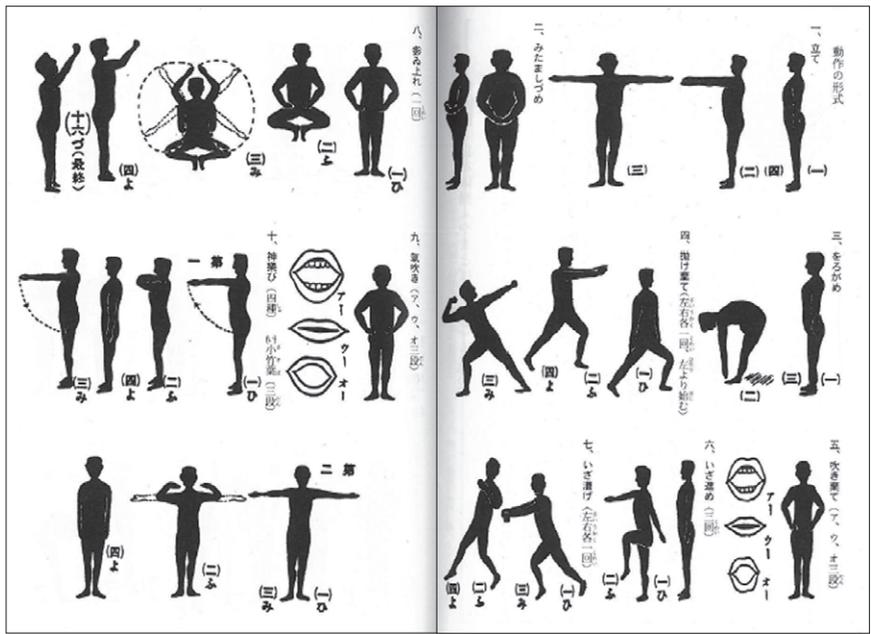
この「日本体操」がいつ開発されたのか。日本体操の挙動「十 神遊び」が桜井恒太郎の紳士体操を参考にしたこと、「やまとばたらきの歌」の完成に佐々木信綱の協力があつたこと、陸軍戸山学校の専門家が協力したとの話が伝わるが、その詳細は明らかではない。⁽⁵⁾ 実子であり学習院大学名誉教授である寛泰彦は、寛が日本人の平凡な生活に密着した実習を展開し始めた時期を大正八、九年頃とし、日本体操の普及もその時期であつたと回顧しているが、大正二年には愛知県立農業学校で実践されていたとの記述もある。⁽⁶⁾ よって現段階においては大正初年頃に考案・実施、その実践が大正九年に書籍化されたとの理解が穏当であろう。大正九年の書籍化というのは博文館から出版された『皇国運動』のことだ。そのうち大正一三年、蘆田書店より改訂をくわえた『神あそびやまとばたらき』が出版され、昭和四年に春陽堂から『日本体操』が出版される。その過程で日本体操自体に大きな変更は認められないが、普及法の面については様々な改良・改訂が見られる。また『日本体操』以前の『皇国運動』「神あそびやまとばたらき」は寛以外の人間の著述が挿入されているが、『日本体操』にいたって寛の単著となつていることも押さえておく必要がある。『皇国運動』は菱沼理式との共著であり、『神あそび

やまとばたらき』は瀧本豊之輔、渡邊八郎、西川義方、加藤完治、守屋栄夫、二荒芳徳らの文を掲載させている。このほかにも『皇学会雑誌 神ながら』に掲載されているドイツ語の日本体操 (BEDEUTUNG DES YAMATOBATARAKIS) をはじめ各種書籍・雑誌に紹介された日本体操が存在するが、その挙動に迫ろうとするならば、『皇国運動』『神あそびやまとばたらき』『日本体操』の書籍を紐解くのが捷径である。流布された日本体操は、多くの場合、この三書から図面・記述を引用しているからだ。

寛は日本体操を「精神体操」という語で表現しているが、それは一六の動作を通して、皇国精神を養い、その結果心身の健康増進をはかるという意図に基づく表現である。その詳細については後述するが、まずはその十六動作を確認したい。動作一覧を左に挙げる。

- 一 立て (軽きおじぎ、間隔をとる)
- 二 みたましづめ (概ね十五秒より二十秒)
- 三 をろがめ (一拝)
- 四 投げ棄て (左右各一回) (注意 一回とあ
るは凡て十六挙動なり)
- 五 吹き棄て (ア・ウ・オ三段の深呼吸)
- 六 いざ進め (三回)
- 七 いざ漕げ (左右各一回)

- | | | |
|----|---|---|
| 八 | 参る <small>ま</small> の上 <small>のほ</small> れ | (一回) |
| 九 | 氣吹 <small>いぶ</small> き | (ア・ウ・オ三段の深呼吸) |
| 十 | 神楽 <small>か</small> び | |
| 一 | 小竹葉 <small>こささ</small> (を三段にふるふ) | 手を三段に動かす
(前・横・上各一回) |
| 二 | 真さ <small>ま</small> き (を三段にふるふ) | 頭を三段に動かす(前
後・横・斜各一回) |
| 三 | 日かけ (を三段にふるふ) | 体を三段に動かす(前
後・横・斜各一回) |
| 四 | 五百津真榮木 (生ひ茂る) | 肘を二段に動かす
(前・後各一回) |
| 十一 | ひと笑 <small>わら</small> ひ | (複唱 かれ、高天原動りて、八
百万神共に笑ひき) |
| 十二 | 出 <small>い</small> まし | (単唱 かれ、天照大御神出でま
せる時に、高天原も、葦原の中
つ国も、自ら照り明りき) |
| 十三 | 天晴 <small>あは</small> れ、お <small>お</small> け | 二拝二拍手
(複唱又は同唱 天晴れ、あな面
白、あな手伸し、あな明け、お
け) |
| 十四 | みこと <small>み</small> のり | 二拍手一拝
(単唱 天照大御神詔り給はく |



十五 あまくだり

葦原千五百秋之瑞穂国は、これ
吾子孫の王たる可き地なり、爾
皇孫就でまして治ろしめしたま
へ、さきくましませ、宝祚の隆
えまさんことは、天壤のむた無
窮なるべきものぞ、と詔り給ひ
き)

(単唱 吾は則ち天津神籬及天津
磐境を樹起て、吾孫の為に齋ひ
まつらむ、汝天兒屋命太玉命は
天津神籬を持ちて、葦原中国に
降りて、亦吾孫の為に齋ひまつ
れ、と詔り給ひき)

(複唱 爾、天津日子番能途途藝
命に詔りごちて、天の石位を離
れ、天の八重棚引雲を押し分け
て、稜威の道別きて、天の浮端
に浮洲在、久士布流峰に天降り
ましき)

(複唱 於是詔り給はく、「此地
は、朝日の直刺す国、夕日の日
照る国なり、故此地ぞ、甚吉き

十六 いやさか

二拝二拍手

(単唱 天皇陛下すめらみこと)

(複唱 弥栄 弥栄 弥栄)

二拍手一拝 (終わっておじぎ)

※『日本体操』『神あそびやま
とばたらき』を元に作成

※単唱＝一人、数人が唱える
複唱＝一人の後皆で唱える

右が一般的に知られている日本体操である。ここで日本
体操を指導者たちが習得していく過程の記録を見てみよう。
青山師範教諭草場弘が数日にわたった講習会の様子を記し
たものである。講習会四日目には身に着けていたようだが、
左は一日目の感想となる。

山本氏の号令で、一つ一つ、大声で元氣よくやる。一
挙動毎に山本氏が、その精神的意義と動作とを説明さ
れる。山本氏の動作をまねて、各自が後をつけてやる
のであるが、ヒ・フ・ミ……といふ呼称と動作とがな
かなか調子よく入り出さない。声を張り上げると手足
が伴はず、動作を気にすると、舌がまはらない。その

中に馴れてうまくなることだらう。⁽⁸⁾

初心者が習得に苦労している様子を窺えるわけだが、ここで注目したいのは草場の記した「ヒ・フ・ミ…といふ呼称」である。これは日本体操の号令・カウントのことだ。例えば「六 いざ進め」は一六カウントでリズムをとる。そのカウントが「いち・にい・さん…」ではなく「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、こ、と、もも、ち、よろづ」となるのだ。なおこれを漢字で記すと「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、万」となる。先掲の日本体操の挙動「四 抛棄て」の下にも注記してあるが、この体操で「一回」と記されているのは、動作をこの一六カウントで一セット行うことを意味する。また一六というカウントも無暗矢鱈に制定されたわけではない。八という数字は「弥」を意味し、それを重ねると「弥弥」を連想させることから、生活活動の煩雑さを払拭させ、大義に留意させるといった注意が込められている。つまり一六という数字は神ながらの精神の遠大さを表す最小限度の印として提示されているわけである。

右図に日本体操の全挙動が挙げられていること、実施する際のカウントも指摘したことにより、日本体操の理解は完結したように思うやもしれないが、これをもって日本体操の動作を理解したことにはならない。なぜならば日本体

操はこれより他にいくつかのバージョンが存在しているからである。右に挙げた日本体操は「正式」と呼称されるものである。

では正式以外のバージョンとは何か。「日本体操」によると正式の他に、略式、歌いながら体操を行うバージョン、さらには神典奉読バージョンが紹介されている。そして各地の実践図を調査し聞き取りを行った結果、各バージョンの詳細や実践上の工夫、女性に配慮したバージョンの存在と実践を確認できた。ちなみに各地の聞き取り調査（継続中）で現在判明していることを端的に言うくと、茨城・岩手・愛知などで行われた日本体操は基本的に正式と略式が中心であること、歌を伴うバージョンは戦前も行われていたが、戦後、寛克彦や三瀆信吾に近い者の間で盛んに行われたバージョンでもあるということである。以下、順を追って正式以外の挙動を紹介する。

まず略式だが、これは神勅の奉唱を中心とする「十一ひと笑ひ」「十二 出でまし」「十四 みことのり」「十五 あまくだり」を省略するバージョンである。つまり「十神遊び」までは正式と同様に行ったのち「十三 天晴れ、おけ」「十六 いやさか」に進み終了となる。なおこの際「十六 いやさか」に進む際、「十三」の唱和が終わると正式では二拍手、一拝を行うが、略式の場合、「十六」と一

連の流れにすするため、本来「十六」の最初に行う二拍二拍手を行わず、「天晴れ あな面白(中略) おけ」の後ただちに「すめらみこと いやさかー いやーさかー いやーさーかー」と唱和し二拍手一押を行う。なお、この略式は時間が限られた場面の他、「十四 みことのり」等にある神典奉唱に躊躇する者が存在した場合の次善策としても活用されたようである。⁽¹⁰⁾なお寛や日本体操を紹介する書籍は、正式だと十分前後、略式だと六分前後の時間がかかるとしているが、実践してみたところこれは指摘通りだった。

次に歌を歌いながら行うバージョンである。この歌自体は何を歌ってもよいというわけではなく、その歌は「日本体操の歌」⁽¹¹⁾として『日本体操』に収録されており、既に戦前の段階で寛の構想に含まれていたことが分かる。なおこの「歌」を歌いながら日本体操を行うと、その運動強度は飛躍的に上昇する。そして歌に合わせて動作を行うのであるから、難易度も上昇する。よって短期間に、または大勢の人間に一斉指導する際には、この歌を歌わない方式を採用し実践したものと思われる。内原や六原の実践記録を紐解いても、日本体操の歌を歌いながら日本体操を行った記録は今のところ稀である。ただしこれは「日本体操の歌」が紹介されなかったことを意味するのではなく、日本体操に関する出版・印刷物には「日本体操の精神」として歌が

記載されており、存在こそすれ歌うものではないとの認識があったのではないかと思われる。寛が提唱した歌を歌いながら動作を行うバージョンを左に挙げる。まずは「一立て」から「四 抛げ棄て」まで詳細が記されているので、左に挙げる。

一 立て
|| 神がらの【おじぎ(軽く)】己が立処

に立ちてこそ【直る】

おのれも人も知るべかりけれ

天地なべて知るべかりけれ

此の天地も挙ぐべかりけれ

天地のむたいや栄え行け【両手を前に

挙げ左右に開く】

二 魂鎮め
|| 玉の緒も【下腹に両手を当てる】も

ゆらにゆらし 天地の みたまをこれ

に 鎮めまつらむ

玉の緒も【下腹部に当てし手を左右

に直し】

さらにゆらかし 天地の 大き生命に

振ひ起さむ【眼を開きて】

三 拝がめ【入念のおじぎをする】

|| 有り難く【生視しつつ】懐かしみ思ふ

心ゆぞ【頭を下げ体を屈めて】

四 抛なげ棄うて 左方へ 吉きうるはしき 事事すべて

伊邪那の神の 心をくだき

右方へ 褻せぎ被ひし 清めの業に 生
れ出しものを いざ神習へ

左方へ よき(ひ「一」) うる(ふ「二」) はし

(み「三」) き(よ「四」) こと(い「五」)

(じと(む「六」) すべ(な「七」) て

(や「八」) いざ(こ「九」) なの(と

「十」) かみ(も「百」) の(も「百」)

こ(こ「千」) ろを(よ「万」) くだ

(ろ「万」) き(ず「万」)

みぞ【左より右へ構え直す】

右方へ ぎ(ひ「一」) はら(ふ「二」) ひ(み

「三」) し(よ「四」) きよ(い「五」)

めの(む「六」) わざ(な「七」) に(や

「八」) なり(こ「九」) だし(と「十」)

もの(も「百」) を(も「百」) いざ

(ち「千」) かん(よ「万」) なら(ろ

「万」) へ(ず「万」)

此の天地は【頭を挙げ体を直す】 開

け初めぬる【生視しつつ】

け初めぬる【生視しつつ】

伊邪那の神の 心をくだき

右方へ 褻せぎ被ひし 清めの業に 生

れ出しものを いざ神習へ

左方へ よき(ひ「一」) うる(ふ「二」) はし

(み「三」) き(よ「四」) こと(い「五」)

(じと(む「六」) すべ(な「七」) て

(や「八」) いざ(こ「九」) なの(と

「十」) かみ(も「百」) の(も「百」)

こ(こ「千」) ろを(よ「万」) くだ

(ろ「万」) き(ず「万」)

みぞ【左より右へ構え直す】

右方へ ぎ(ひ「一」) はら(ふ「二」) ひ(み

「三」) し(よ「四」) きよ(い「五」)

めの(む「六」) わざ(な「七」) に(や

「八」) なり(こ「九」) だし(と「十」)

もの(も「百」) を(も「百」) いざ

(ち「千」) かん(よ「万」) なら(ろ

「万」) へ(ず「万」)

ように動作と歌を一致させるわけだが、紙幅の関係上、
「五 吹き棄て」以降は歌のみを挙げるにとどめる。なお
「十一 ひと笑ひ」から「十六 いやさか」までは正式と
変わりない。

五 吹き棄うて 汚かか呑み 吹き棄ちて

善きうるはしき 事創めなむ

いざ共に 汚かか呑み 堅洲国 根の

国遠く 気吹き放たむ

六 いざ進め 現しき 国の人人は 手を引き引かれ

睦ましく

須佐の御神に 神習ひ 天照る神を仰

がまく

野越え山越え 里越えて 皇居さして

いざ進め

七 いざ漕ほげ 左方へ 豊葦原の 中つ国 我が日の

本の 真楫取り

右方へ 国とふ国を 引き連れて 神

の御許へ 漕ほぎ往かむ

八 参まみ上のぼれ 上れや高き 天の原 大地なべて提ひげ

て

天照る神に 捧たげまく 休やすらふことな

く参まみ上のぼれ

歌を伴う日本体操の様子が事細かに理解できよう。この

九 氣吹きいぶ 〓日の神に 齋いく心の まことあらば

氣息とふ氣息は 神をこそ生め

十 神楽かび

①笹葉 〓前方へ 此処はかしこき天の原 皇大

神の恵ましし

左右へ 愛情を配まる奇魂 込めし笹

葉を手草とし

上方へ 手に手伸ばばして手伸しくも

一つ心にはたらかむ

②真折蔓 〓前後へ傾ける 道あきらめて もの皆

に 所授くる幸魂

左右へ傾ける 真折蔓に取り化して

頭にまとひ神ながら

左右へ向ける 滞むことなく宜しなへ

あやに明やけく振競へ

③日かげ 〓前後へ傾ける 天照る神の日の御光

名に負ふ蔓身にしめて

左右へ傾ける 空筥とどろこし歌ひ舞

ふ 面曲は面曲にかがやきて

左右へ向ける あな面白の神遊び 御

神も人も隔てなく

或いは

前後へ傾ける 日影の蔓身にしめて

神の靈光に齋いきなば

左右へ傾ける 神の御生命に容れられ

て 互に伸びて伸び伸びて

左右へ向ける 一つ生命に振はしく

果も知らに拈がらむ

④栄木 〓上方（胸） 千早振る 神の御代より

参る上り 参る上り行く 大幹に

下方（横腹） 百千万の 瑞枝さす 此

ぞ真栄木 神の御姿

次に神典奉読バージョンである。これには動作が伴うバージョンと伴わないバージョンが存在するようである。動作が伴わないのに何をするか？という疑問がわくが、実施するのは基本的に神典奉読である。寛は日本体操の一方法として神典読誦を挙げており、読誦においては、示す箇所すべてを読むことは勿論、その中から数節、一節を抜き出して読誦することも可能としている。動作を伴うバージョンについては日本体操号と銘打たれた『皇学会雑誌 神ながら』第一一巻第一一号（昭和一一三）の「神典と日本体操」に詳しいが、ここでは省略する。なお読みあげる文章は『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』等の文章である。実施人数は一人でも複数でもかなわぬが、読誦の前に二

拝二拍手、読誦の後に二拍手一拝を行うとしている。その実施方法を左に挙げる。

多数人合同して読誦する場合には、「イ 或は毎節別人が音頭を取りて複唱することも出来、ロ 或は毎節別人が単唱し、全部に互り単唱とし、他の人は謹聴することも出来、ハ 或は場合によれば全部を同唱することも出来る。その他、其の場合に応じ如何様にも読誦し得るが、読誦の前後に拝及び拍手すること、丹田に充分に力を込むることは常に忘れぬ様に致したい。⁽¹²⁾

そして現時点で確認できる最後のバージョンが女性に配慮したバージョンである。「六 いざ進め」「八 参る上れ」の動作に見られる女性用動作のことを指す。『皇国運動』や、大正一一年七月に通信官吏練習所の印刷した「皇国運動略解」によると、通常、力士の行う蹲踞のような動作が「八 参る上れ」に入っているが、「夫人は立膝にて可なり」と開脚を伴う動作に配慮を示している。同じく「六 いざ進め」についても、太ももを腰の高さまで上げた動作が含まれており、女性には足踏みで構わない旨が表記されている。これを一つのバリエーションとして、他と比較するには問題があるかもしれないが、画一的な動作しか存在しなかったことへの反証としてあえて指摘しておきたい。

ここまで日本体操のバリエーションを紹介してきたが、まとめると左の様になる。基本となる「正式バージョン」・奉唱等を除いた「略式バージョン」・日本体操の歌を歌いながら行う「日本体操の歌バージョン」、「神典奉読バージョン」、女性に配慮した「女性バージョン」である。

なおこうした日本体操を、そんなに激しいものではあるまい、静かな肃々とした体操であろう……と考えを巡らせる向きもあるかと思うが、結論からいうと、それは大きな間違いだ。松川正彦は日本体操の動作を左のように分析する。⁽¹³⁾「四 抛なげ棄てて 〓 全身運動」「五 吹き棄てて 〓 発声及呼吸運動」「六 いざ進め 〓 全身運動」「七 いざ漕ほげ 〓 全身運動」「八 参まる上れ 〓 上半身運動」「九 気吹いき 〓 発声及呼吸運動」「一〇 神楽かび 〓 上半身運動」手を抜いて行うのなら話は別だが、真面目に行うならば松川の「運動」という表現をハードな印象と共に理解できるだろう。正式の日本体操を行うと十分ほどの時間を要し、それを通して行うと冬場でもうっすら汗がにじむのを覚える。⁽¹⁴⁾その意味において、やまとばたらきを日本体操と表現するのは妥当であるといえよう。

二 日本体操の思想

——「精神体操」という用語を切り口に——

日本体操の思想を理解するには『日本体操』や寛の著書を紐解けばよいわけだが、本項ではその理解を促すため、ある言葉を切り口として日本体操の思想を把握していきたい。

その言葉とは「精神体操」⁽¹⁵⁾である。寛が日本体操を表現した言葉の中に存在するものだ。これは一般的な体操が企図する体力向上・集団モラル向上といった目的にとどまらず、日本体操の有する神ながらの精神を培うという目的に依拠する表現だが、その思想を確認していくと、単に一個人の精神修養以上の意味が内包されていることが分かる。まずその意味を嚆矢とし、日本体操の思想に立ち入ってみたい。

ではその意味とは何なのか。それは日本体操が自分以外の者に実施してもらっても効果があるとされていることである。体操であるから肉体的挙動が伴う。一般的に考えて、体操を実施した者以外に、肉体的効果が反映されることはない。これは日本体操にいたっても例外ではなく、寛が常軌を逸した内容を主張しているのではない。精神的作用を他人に及ぼすことができると言っているのである。寛は日

本体操実施の方向性として左の「日本体操の旨八つ」⁽¹⁶⁾を挙げる。第一項にその訴えを確認することができる。

一 何人も時と所とを選ばず行ひ得べく、且他人をして代行せしめ得る体操なり

二 心身を合せ調ふる為毎早朝規則正しく行ふべき運動なり

三 通例、一度は一回に止め二回以上繰返さざること
四 運動者自身の人格の本質を反省することを運動の本旨とする

五 身体を以て鍛錬の表現とすることを期す

六 要を採り、本を求め、平凡に帰するを以て標準とする

七 内部の自然自発に基きて行ふ運動にして、外部の命令を受けて機械的に運動するものにあらず

八 運動の形式及力の入れ方に就きては、常に各自をして相当に工夫せしむること

寛はしばしば日本体操を「神隨らの精神を養ふ」と同時に「心身を清むる禊祓の動作」とも表現している。⁽¹⁷⁾このニュアンスを体操という語で考えるのが難しければ、祈りという語でイメージすると理解が促されるかもしれない。「神隨らの精神」をこの体で表現する日本体操は、すなわち自分も他者も、さらには世界さえも清めんとする強い祈

りを伴った体操であるといった観であろうか。なお寛が日本体操を考案・実践した時期は、「○○体操」といった様々な体操が編み出された時期でもある。『各種保健体操の理論と実際』¹⁸⁾は青年団体操、工場鉱山基本体操、工場体操、相撲体操、女子保健体操など約四〇の体操を紹介しているが、体操の効能を他人にまで及ぼせるといった思想を含む日本体操は、明らかに他の体操と異なる側面が認められる。これは『みそぎ錬成読本』をはじめ指摘がなされているものの、あまり注目されているとはいえないため、特に注意を払う必要があると考える。このほか「日本体操の旨八つ」に「人格の本質の反省」「内部の自然自発に基きて行ふ運動」といった重要なキーワードが含まれているが、これらも精神体操という上位カテゴリーを念頭におくと理解が促進されるかと考える。

では他人にも影響を及ぼし、自己における人格の本質にアプローチするといった精神体操―日本体操―は、いったいいかなる思想に裏打ちされているのか。なぜ他人にも効果を及ぼし、自己の人格の本質にまで切り結ぶことができるのであろうか。

結論からいうと、この世に存在するものは「生命」を通してつながっており、日本体操はそれを体験・進展させる運動と位置付けられているからである。寛によると日本神

話は生命の流れを示したものとされている。よってその日本神話を、自身の体を通して理解する日本体操は、自分と生命とのつながり、そして自分と他者とのつながり、また自分と集団とのつながりを体験し、かつ生命を進展させていく手段といえるのだ。

これを裏付けるのが「みこと我」や「三代一人」といったキーワードである。三瀧信吾が日本体操考案の経緯を語った中に「天地宇宙の大生命の結晶として、神の御生命を賜った「みこと我」を健康に育てる」という言がある¹⁹⁾。まずは自己と生命のつながりを自覚しそれを育成・発展させていくという方向性を表した言葉だ。そして他者も自己と同じように生命から派生したものであるから、自己の体を通して生命を進展させていくことで、生命とつながっている他者も発展していくといった理解が成立する。この心境にたち実践者としての心境を歌ったのが加藤完治の「數島の 大和心を人問わば 受持分担 一心同体」²⁰⁾であろう。生命を通して一体であるという段階にとどまらず、一体となったのちに己の立場によって、生命を發揮していく心持を示している。寛の説く人と神との連続性、現実社会における実践法を簡潔に示した歌といえる。

そして「三代一人」というのは、生命とつながる「自分」という存在をより明らかにするキーワードである。寛

の言葉に目を向けるなら「個人のいのちは祖先、自己、子孫を貫く『三代一人の大生命』の表現であり、個人の精神はその三代を一人として錬った精神の表現」といった表現となる。⁽²¹⁾つまり現代という時間軸の中で、生命とのつながりを自覚していく「みこと我」の感覚、そして生命とのつながりに伴い生じる過去・未来という時間軸を貫く「三代一人」の感覚。これらが神代神話を紡ぎ出した「いのちの要求」の一表現であり、またその要求・方向性を体現した日本体操を支える思想の一表現であり、かつ日本体操から修得すべきものといえる。なお、このあたりの感覚は、寛がしばしば口にする「有るが故に有らしむる」といった言と密接な関係を持つことを指摘しておく。先述の「日本体操の歌」とは別に「神遊び日本体操の歌」という歌が存在するが「中と外との 隔なく 今と昔を 貫ける 皇国の精神 心して 祖を背に負ひ 子を抱き 霊と現身 離さずに おのれ即ち 神となり 笑へ弥栄の 一笑 一笑」という内容は、まさに「みこと我」「三代一人」の意義を十分に訴えているといえよう。

よって日本体操の思想へ分け入るには、寛の訴える「生命」の流れに注目する必要がある。「みこと我」「三代一人」は自己と生命の関係性を示唆するキーワードであるが、次はその生命の性質について理解の歩みを進めていかねば

ならない。寛によると神代神話は、その根本たる大生命が時には順調に、時には苦難や失敗を経て成長していくさまを表現しているという。⁽²⁵⁾そして生命の発展サイクルとして、根本存在である生命に触れること・その実感から各立場で実践していくこと・実践上において様々な事情情実を踏まえること、といった過程を神代神話に即して指摘している。これを表す具体的なキーワードが「参上り」「天降り」である。寛は「参上り」を大生命に触れる過程を指す言葉として、「天降り」を大生命に触れた者が実践をしていく過程を示す言葉として表現している。挙動の「八 参る上れ」「十五 あまくだり」は、まさにそれを強調して表現したものである。そして日本体操「十三 天晴れ、おけ」だけでなく、寛がしばしば唱えた「天晴 あな面白 あな手伸し あな明け おけ」(『古語拾遺』)という唱え言葉は、そうした生命が広がりゆくさまを象徴した言葉であることにも注意を払わねばならない。

なお「参上り」「天降り」のサイクルを表す一例がスサノオ命の神話である。⁽²⁶⁾スサノオ命は中つ国から高天原に赴き、そしてウケヒ、勝さび、岩戸隠れを経て、高天原を開放された。そして追放された後、八岐大蛇を倒し草薙の剣を手に入れ、再び高天原に上がる。こうした神話を、生命の流れの表現として理解し、現実生活を生きる人間がその

生命の流れに触れるための手段が日本体操なのである。

以上、日本体操は「生命」の流れを体験するものであり、その流れは日本神話の理解に基づいていることを指摘した。よって日本神話が生命の流れを表現していることを念頭におけば、その体操が、日本神話の流れを時系列順に追体験できるように構成されていることについても、その必然性を認めることができよう。寛が「始祖以来の生活体験を身体の運動により、弥々自覚せんとするものなり」と表現するのは、それに由来するし、精神体操というのも、自己の修養のみをもってよしとするのではなく、自己を通して他者にまで効果を及ぼそうとしている背景が存在していることを忘れてはならない。

以上、思想の骨子たる部分を示したものの、日常への応用・実践については十分に触れていない。よって次項において体験者の証言を用い、その領域にまで考察を進めたい。

三 実践者の証言

こうした思想に踏み込む必要があるのは、日本体操の実態、さらには寛の神道論に踏み込むことなく、日本体操や寛を論じる傾向が認められるからである。日本体操の読み方が特殊であること・神道用語が使用されていること・戦前批判の立場等、様々な観点から、批判的意見が投げかけ

られることがあるが、それらが実態の一部を恣意的に切り取ったものであるケース、感情的な批判であるケースは珍しくない。原武史や片野真佐子が「参上り」「天降り」に関連した寛の神道論についてミスリードをしていること、また竹田稔和をはじめ複数の研究者が「神がかり」「奇矯」といった前提で寛を眺めていることは拙稿で指摘した通りである。⁽²⁸⁾ 寛の著作等を丹念に紐解き、その理解に基づき思想を論じることは研究者として当然のことだが、貞明皇后への御進講録である『神ながらの道』を皇太子殿下（昭和天皇）への御進講録であると主張し論を進めた鈴木貞美のように、信じたいミスリードをする者が存在することも指摘しておかねばならない。⁽²⁹⁾

よって、そうした問題のある考察を進める者たちへの反論として、またそもそも至極当然の作業ではあるが、実態を把握するという方向性からも、日本体操がどのような思想のもとで実践されたのかを明らかにする過程において、体験者たちの証言を吟味することも論考に必要な不可欠な工程と考える。

その意味で森本繁による日本体操の思想に触れた証言は貴重である。森本は加藤完治によって指揮された満蒙開拓青少年義勇軍訓練所で訓練をうけ、満洲開拓に従事した当事者である。訓練所では日課として日本体操が行われてい

たため、体験者の談として非常に興味深い。森本の日本体操の認識を左に要約する。³⁰⁾

「立て」

号令で、安らかな気分で正常直立の姿勢をとり、敬礼をし、両手を左右に開いて静かに下ろす

「みたましずめ」

目を閉じ、精神を鎮め、呼吸を整える

「をろがめ」

天地にたいして最敬礼をし、いよいよ運動にはいる。

「抛げ棄て」

世のよこれを身の濁りを棄てる運動をする

「吹き棄て」

深い呼吸をするとともによこれを遠く吹き払う

「いざ進め」

高らかな足踏みをしつつ理想に向かって邁進する意気をあらわす

「いざ漕げ」

海原を漕ぎわけ、理想郷へと突進する

「参上れ」

高天原の神のみ元へ参る心をもって両手を高々と天に開く

「気吹き」

「吹き棄て」と同じ呼吸をするのだが、その心は前とは反対に、清められた心をもって世を美化するために

気を吐く

また今少し噛み砕いて表現したものとして伯爵二荒芳徳『皇国運動』の偉大なる精神的効果³¹⁾がある。一日の生活を車の運転に例えるなど、興味深い語り口が見られ、熱心な推進者として面目躍如の観が認められる。二荒は日本体操を朝晩行うことを薦め、その実修上の効果として左の様に述べる。

早い話が、一日働いて眠の床に入らうとする前に、一日の事を考へると、意に叶つた事もあれば、不快な事もある。意に叶つた事は、『天晴れ、あな面白、あな手伸し、あな明け、おけ』で天照大神様に御礼を申し上げ、不快なことは、『抛げ棄て』『吹き棄て』で放擲してしまふ。さうすれば他人の自己に対して為した不快な事、侮辱、疑惑、不信等は、もうその人にはついてゐなくて、世界の外に棄てた事になつて、神の御懐に抱かれて眠ることになる。床に入つて清々した心持になるほどあり難いことではないので、一言に云へば『やまとはたらき』によつて一日の総勘定をすることになるのである。

寛は「日本体操の旨 八つ」で「六 要を採り、本を求め、平凡に帰するを以て標準とする」という方針を示しているが、二荒の言はその方向性に合致するものといえる。

寛の著作『風俗習慣と神ながらの実修』（清水書店、大正七）は一日の実修、一年の実修、一生の実修といったように日々の生活を例に挙げ、神ながらの精神を生活に活かす具体策を説いており、二荒もそうした性質を踏まえて表現をしたものと思われる。中西旭の「日常の生活行動にも留意され、さらに、容易になしうる行」という言は、こうした日常生活にまで射程を広げた配慮を解した指摘である。⁽³²⁾

経験者の証言から、日本体操の各動作の意味、そして日常生活への活用について触れたが、今一つ注目すべきが、日本体操の最後にある「十六 いやさか」でなされる「すめらみこと いやさかー いやさかー いやーやーさーかー」の発声である。第一項で挙げた正親町鍾子の御歌「弥栄に さかえたまへと 君をいはふ 声とよむなり 国の内外に」で詠まれた「弥栄」とは、日本体操の発声「いやさか」を指す。そもそも寛の講演・著述、そして日本体操の実践において「天皇陛下、万歳」という発声は用いられず、もっぱらこの発声が行われる。そして前掲の草場弘も行事記録の中で、絶叫という言葉を用いているように、これはささやきや単なる朗詠ではなく、肚の底からの発声を伴う所作であった。

ではそもそも何故「てんのうへいか ばんざい」ではなく「すめらみこと いやさか」なのか。寛は「いやさか」

が「ばんざい」よりも根本精神を明確に表しているからだと語る。⁽³³⁾今少し、寛の思想に沿ってその主張をなぞるならば、「いやさか」が一個の肉体が万年まで生きた喜びを表現した言葉ではなく、各自の命を各自相当の全きを尽くすよう、すなわち三代一人として永遠に栄えるようにと祝い願うことを表現した言葉だからだという。⁽³⁴⁾そして発音に濁音がないこと、発声が末広がりであること等の実践上の長所も合わせ訴えるのである。また「いやさか」の発声回数⁽³⁵⁾が三回であるのは、造化三神の数によるものとされる。

三瀧信吾が、日本体操が侮蔑・軽蔑の念・狂信的な価値観を伴って語られることに危惧の念を抱いたように、⁽³⁶⁾実態を無視して語るものほど恐ろしいことはない。その意味で実践者たちの言葉に耳を傾けることは必要不可欠であるし、渡邊八郎が言う、日本体操をいわゆる忠君愛国の精神を鼓舞するものではないとの指摘も念頭において分析を加える必要がある。⁽³⁷⁾戦前に神道を唱えた有名人だからといって、十把一絡げに寛や日本体操を扱うのは大問題である。葦津珍彦がいうように当時の神道人の間における温度差や、意見・主張の差異も勘案する必要がある。⁽³⁸⁾日本体操が実施されたすべての施設・団体が、全く問題のない素晴らしいものであったなどとは言わない。文献を紐解き、日本体操の本旨を理解し、それを正しく活用したもので、できなかった

もの、不正に利用したものの、といった当然の分析を加えるべきで、間違ってもイデオロギーや政治的主張から実態を無視するようなことがあってはならないと考える。

四 実践環境について

日本体操を実施した組織・団体は少なくない。そのうち比較的よく知られているのが、農業教育に関わった人物——山崎延吉や加藤完治などを中核とする広がりである。例えば『内原町史 通説編』⁽³⁹⁾は、実践場所として愛知県立農林学校（のちの愛知県安城農林学校）・山形県自治講習所・日本国民高等学校・満蒙開拓青少年義勇軍訓練所を記述しているが、愛知県立農林学校は山崎、後の三施設は加藤が長を務めている。特に最後の義勇軍訓練所は、入所者の数も多かったこともあり様々な手記・記録が残されている。なおこうした広がりについては、山崎が加藤を評価し自身の学校に招き育てたことをはじめ、那須皓⁽⁴⁰⁾や石黒忠篤⁽⁴¹⁾といった加藤の理解者による支援、当時の社会状況といった背景を指摘する必要があるが、本項は実践事実⁽⁴²⁾に焦点を絞り考察を進めたい。

先行研究は右の四施設以外に山崎の神風義塾における日本体操実践を紹介している⁽⁴⁰⁾。しかしそうした施設以外における実践はあまり注目されていないため、本項はその点を

念頭に稿を進める。例えば山形県をはじめとする東北地方の実践実態である。加藤が山崎の愛知県立農林学校から離れ、山形県自治講習所の所長に就任した際、加藤は積極的に荒地の開墾に取り組んだ。その場所の一つが山形県大高根だが、大高根出身で、自身も自治講習所に通った石沢秀雄は日本体操実践にあたっての細かなコツや注意点についての記録を残している。その史料は実践者による具体的な取り組みと、加藤を中心とする日本体操伝播の様子を「加藤完治先生↓西垣喜代次先生↓大高根道場↓一般 加藤完治先生↓高橋猪一先生↓黒田栄四郎先生↓石沢秀雄↓追進会↓一般」⁽⁴¹⁾と書き残しており、現地の実践実態の一端を伺えるものとなっている。この他、東北地方における実践としては岩手県が有名で、県立六原青年道場⁽⁴²⁾は茨城県の義勇軍訓練所には及ばぬものの、複数の体験談が残されており、国民高等学校においては、かの宮澤賢治が日本体操を行った記録も残っている⁽⁴³⁾。この他、調査を進めたところ、個人の手記や自費出版の書籍をはじめ、少なくとも記録が残っていることを確認すると共に、戦後、恣意的な調査者による執拗な追及、戦前批判の文脈から為される一方的な批判から、公開を控える事例も多々あることを確認した。先述の森本はそうした状況下、客観的に考えることを訴えた人物である。

そうなる」と現時点において最も史料の残るのは義勇軍訓練所であり、そこから実践実態を探るのが効果的である。義勇軍訓練所は国民高等学校に近接して建てられた施設で、拓殖訓練のために創設された施設である。その日課は元訓練生をはじめ、さまざまな書物に残されているが、その大略は左の通りだ。⁽⁴⁴⁾ 午前五時半起床ののち、午前六時に点呼が行われる。そののち七時まで朝の礼拝行事が行われたのちに、日本体操が実施される。礼拝行事は中隊長は礼拝台の上に立ち、ゆつくりと二拝二拍手一拝を行った後、「あつぱれ、あなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ」「すめらみこと いやさか いやさか いやさか」と唱えた後に、義勇軍綱領を唱える。なおこの礼拝は義勇軍において欠かすべからざる存在であり、たとえ悪天候であろうとも兵舎で行われていた。この後に日本体操が実施され、そののち駆け足、七時十分から朝食、その後が学科と続いていく。

加藤の伝記や手記⁽⁴⁵⁾を紐解くと、当時の世界恐慌を契機とする深刻な国内不況、その不況を打破すべく未開の荒野を切り開く開拓の提案、その実現に向けての努力の跡が確認できるわけだが、そうした関連性から農業教育と拓殖教育とは不可分の関係性が指摘できる。農民教育で採用されていた日本体操が拓殖教育の現場でも採用されたのは、右の

関係性に基づくことを忘れてはならないし、そうした背景を欠き恣意的解釈を加えるのは不適當である。

これ以外にも日本体操が実践された施設・学校は多数存在する。例えば秋田県立西目農業学校、角盤国民学校⁽⁴⁶⁾（鳥取県米子市）の事例は比較的容易に目にすることができる。また農業講習会、開拓講習会でも日本体操は採用されている。雑誌『弥栄』には講習会の告知や報告が掲載されており、その活動の跡が確認できる。

また拓殖・開拓開墾との関与ではなく、現在で言う情操教育・生徒指導・学校行事にあたるものとして研究・実施された記録も残されている。東京都牛込や神奈川県横須賀市の少年団、鳥取県師範学校付属の少年団、東京の牛込・早稲田小学校や、愛知県知多高等学校や半田の高等学校、静岡県沼津の高等女学校、下田歌子の実践女学校など⁽⁴⁷⁾である。またこうした広がりと共に考えるべきことが、日本体操を推進した二荒芳徳、瀧本豊之輔、守屋栄夫の存在である。特に二荒は少年団における日本体操実践に力を注いだ⁽⁴⁸⁾が、その詳細は後日に譲る。

この他、詳細は不明ながら宮家における実践や、通信省・朝鮮・台湾・満洲における実践などは写真等に記録され、その跡を確認することができる。⁽⁴⁹⁾ また一般向けとして雑誌『実業之日本』や重見武平『集団勤労の葉』が日本体

操を紹介しており、その中には杉本清治『四十からの心身改造法』（白揚社 昭和一五）のような書物もあるが、本項は紙幅の関係上、大まかに触れるにとどめる。

おわりに

かつて中西旭は寛克彦・今泉定助・川面梵児について記した論文の中で左のように述べた。「それらのいづれの教義でも、もし、国民の間に相当ふかく理解され且つ実践されてあつたとすれば、却つて、かかる戦争は未然に防止されたか、又は、それが間に合わなかつた際も、かかる悲惨な敗北にはいたらなかつたであろう」と。⁽⁴⁹⁾中西の考察に議論の余地が認められる点もあるが、寛の訴える内容が正しく理解・実践され得なかつたという分析は、寛泰彦が「父寛克彦のことども」で回顧した内容と軌を一にする。

そんなことはあるまい。もし仮にそうであつたとしても今は違う。そういった声が聞こえてきそうだ。しかしそれに対して、特に戦後の状況に関しては明確に反論することが出来る。筆者は数年前から寛克彦に関する学術発表・学術論文を発表しているが、そこで目にしたのは多くの結論ありきの寛への論評・批判であつた。「神がかり」「奇矯」といった言葉で人物を評することを当然とし、寛の思想や著作の片鱗を切り取り解釈をする者、事実関係すら誤つて

評論を加える者、近代神道研究を無視した国家神道という文脈から語る者等が存在する。昨年発表した論文で原武史・片野真佐子が寛の神道論を誤つて読み取つた事例を紹介したのはその一例だが、貞明皇后への御進講録『神ながらの道』を昭和天皇への御進講録と間違つて論考を進める鈴木貞美といった研究者も存在することは先述した通りだ。本稿の目的は冒頭に述べた通りであるが、文献や史料に基づき日本体操、寛克彦の思想と実践態を明らかにする工程は、そうした目的のもと自然に派生してくるものであつた。その目的に今一度立ち返り本稿を振り返るならば、その任はある程度達成することができたと思われる。特に体験者の証言を集め、文献を紐解く際の視座を培えたことは実態解明の上で大きな意義があつた。ただし文中で触れたように、人物関係や時代背景等、詳しく論じる必要のある部分が少なくない。そして紙幅の関係上削らざるを得なかつた部分は極めて多い。特に第四項に関する成果は近日中に公開する。

三藩信吾は日本体操について左のように述べた。「その為には或は帝国主義的国粹主義として表面的批判がなされるかもしれない。しかし、その内容実質はむしろその逆で、これを是正し、脱皮せしむる大きな力を保有するもので、世界的な日本人の心身の涵養に他ならぬ。今からでも、更

めてその普及をはかりたいものである⁽⁵⁰⁾。三瀧の指摘を絶対視するわけではない。しかし三瀧がなぜ斯様に述べたか。そして寛がどのように日本体操を作り上げ、どのような実践が行われたか。そうした考証も経ずして批判を加えることに私は絶対に頷くことはできない。先般、寛克彦の未刊行原稿を閲覧させて頂き、現在読解を進めている。そうした未刊行史料を含め研究を進めていくことを約して筆をおきたい。

注

- (1) 時期によって「皇国運動」「日本体操」と表記を別にするが、以降の表記は特別な事情がない限り「日本体操」に統一する
- (2) 三瀧信吾「寛克彦博士二十年祭に当りて」(『月刊カレント』第一八巻七号 昭和五六) 頁一九
- (3) 寛克彦「神あそびやまとばたらき」 蘆田書店 大正一三頁二一七
- (4) 寛克彦『日本体操(普及版)』春陽堂書店 昭和一四 頁一五一〜一七一
- (5) 桜井と佐々木の件は前掲(3)の頁一五一〜一七に記されている。戸山陸軍学校の件は石沢秀雄の記した『日本体操』に記されている。また寛は元々体育の才に秀でていた跡が見られる。三瀧信吾は左の様に述べる。「元来、体育をも得意とし、勇気もあり、曾ては軍人を志願しつつも、少年の時、運動会の競走中、転倒して指一本を関

- (6) 寛泰彦「父寛克彦のことども」(『学士会会報』六九〇 昭和五二)、頁三二五 内原訓練所史跡保存会事務局編『満州開拓と青少年義勇軍 創設と訓練』(内原訓練所史跡保存会 平成一〇) 頁四六
- (7) 『皇学会雑誌 神ながら』第一一巻第一一〇号 皇学会事務局 昭和一三
- (8) 草場弘「壮なる哉・土の錬成―開講式に臨みて―」(皇民錬成研究会編『興亜日本魂の教育道場』 帝国教育新聞社 昭和一四) 頁二二六
- (9) 前掲書(4) 第七章「いやさか」の発声 頁二二六〜二三四
- (10) 岩本憲治『健児教育と皇国運動』大日本少年団連盟需品部 昭和一〇 頁五三〜五四
- (11) 前掲書(4) 頁一七二〜一八三
- (12) 前掲書(4) 頁一八五〜一八六 なお引用箇所「」は筆者による
- (13) 松川正彦『みそぎ錬成読本』桜木書房 昭和一九 頁一八八〜二二一
- (14) 田郷虎雄「亜細亜の柱」誠文堂新光社 昭和一六 頁一〇八にも類似の指摘がある
- (15) 前掲書(4) 序
- (16) 前掲書(4) 頁二〇七〜二〇八
- (17) 前掲書(4) 頁一

- (18) 中谷重治『各種保健体操の理論と実際』育生社 昭和一三
三
- (19) 前掲書(2) 頁一八
- (20) 加藤弥進彦編『受持分担一心同体』加藤完治記念館 平成二〇
- (21) 前掲書(4) 頁八
- (22) 前掲書(4) 頁七〜八
- (23) 前掲書(4) 頁八一
- (24) 『皇学会雑誌 神ながら』第四卷第一号 皇学会事務局 昭和六 頁一四
- (25) こうした考えの基盤にあるのが「産霊」「生命」による美化の働きである。『神ながらの道』にも確認できるが、『続古神道大義 上巻』頁六八〜七一等にも確認できる。『続古神道大義 上巻』では第二部の終盤から説明がなされている。
- (26) 前掲書(4) 頁一五一
- (27) 拙稿「寛克彦の神道教育―その基礎的研究と再評価への試み―」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四九号 平成二四)
- (29) 鈴木貞美「西田哲学の意味―地球環境が問われる時代―」(ポーツランド日本学会「日本文化―その価値観の多様性―西田幾多郎生誕140周年記念シンポジウム」報告書) 頁一四
- (30) 森本繁『ああ満蒙開拓青少年義勇軍』家の光協会 昭和四八 頁八六〜八七
- (31) 二荒芳徳「皇国運動の偉大なる精神的効果」(『実業之日本』第二八卷第一〇号 大正一五) 頁九〇〜九二
- (32) 中西旭「神道世界観の展開―川面・寛・今泉を中心とする群像―」(『明治維新神道百年史 第五卷』神道文化会 昭和四二) 頁四二七
- (33) 前掲書(4) 頁二二六
- (34) 前掲書(4) 頁二二八
- (35) 前掲書(4) 頁二二一〜二二二
- (36) 前掲論文(2) 頁一九
- (37) 前掲書(3) 頁一三九
- (38) 葦津珍彦が「国家神道とは何だったのか」(神社新報社 昭和六二)で寛について触れたのは頁一六四〜一六五。それ以降の頁において様々な勢力が存在したことを指摘している。
- (39) 内原町史編さん委員会『内原町史 通説編』内原町 平成八 頁九八二
- (40) 岡田洋司『農本主義者山崎延吉―皇国と地域振興』未知谷 平成二二
- (41) 私家版 石沢秀雄『日本体操』(平成二年二月一日)。加藤完治記念館所蔵
- (42) 六原の様子は、伊藤金次郎『六原道場』(協同公社出版 昭和一八)や千田みさほ『六原道場思い出の記』(社陵印刷 昭和五七)に詳しい。
- (43) 佐藤成編著『宮沢賢治 地人への道』川嶋印刷 昭和五九 頁二〇七
- (44) 前掲書(30) 頁八五〜八六
- (45) 『加藤完治全集 第五卷』(加藤完治全集刊行会 昭和四二)をはじめ、中村薫『加藤完治の世界 満州開拓の軌跡』(不二出版 昭和五九)、加藤弥進彦『人づくりと農

業 平成維新への提言』（日本農業実践学園「人づくりと農業」刊行会平成一四）

(46) 西目農業学校は『秋田魁新報』の昭和一八年七月一日の夕刊二面。角盤国民学校については『興亜教育ト国民学校 第一巻』（満州移住協会昭和一六）など。

(47) こうした学校については中村正元の「皇国運動の実施」『少年団研究』第二巻第八号 日本少年団連盟 大正一四）や「我が校の皇国運動を披露して之が実施を希望する」『少年団研究』第三巻第一二号 日本少年団連盟 大正一五）や前掲論文（31）に詳しい。

(48) 前掲論文（2）、前掲書（3）をはじめ『朝鮮』第一〇六号（朝鮮総督府大正一三）などに記載、写真が掲載されている。

(49) 前掲書（32）頁四三八
(50) 前掲論文（2）頁一九

本稿は公益財団法人日本科学協会笹川科学研究助成事業「日本体操の研究―実態調査と実技の記録・保存―」（中道豪）の成果を基に作成しました。また日本体操の実態調査・史料閲覧・史料収集にあたり寛克彦の孫であり三瀧信吾の子息である三瀧正道氏、加藤完治の三男である加藤弥進彦氏、東京神保町の叢文閣書店を始め、多くの関係者から証言・協力を頂きました。顕幽を問わぬ御援助に謹みて感謝を申し上げますと共に、更なる研究の深化と成果発表を誓わせて頂きます。

（国立広島商船高等専門学校非常勤講師）